

【演題名】他職種との連携により自宅内移動自立を獲得した症例

(24/60 字)

○中川由子¹⁾，鶴巻恵理子¹⁾，北村礼子¹⁾，早津由紀子²⁾菅原浩美³⁾，清水美穂³⁾，荻莊則幸³⁾

¹⁾医療法人社団らぼーる新潟 楽いちデイサービス

²⁾医療法人社団らぼーる新潟 居宅介護支援事業所ゆきよしとやの

³⁾医療法人社団らぼーる新潟 ゆきよしクリニック

【はじめに】今回、「歩いて移動したい」という希望のある腰椎圧迫骨折の利用者に対し，当法人の他の施設の理学療法士(以下 PT)，介護支援専門員(以下 CM)と定期的に連携しながら介入した．その結果，自立歩行を獲得し，他職種連携の重要性を再確認したので報告する．

【症例紹介】80 歳代男性．第 4 腰椎圧迫骨折，変形性股関節症．要介護 3．利用サービスは通所介護週 2 回，短時間通所リハビリテーション(以下通所リハ)週 1～3 回．移動は車椅子を使用しており，自宅内を歩いて移動したいと希望していた．

【介入経過】X 年 7 月，歩行は平行棒内にて介助を要したため，下肢や体幹の筋力，歩行能力の向上を目的に筋力強化練習や歩行練習を実施した．徐々に身体機能の向上がみられ，X 年 9 月から歩行器歩行練習に移行した．X+1 年 1 月から自宅に導入するために通所リハで担当していた PT と協議のうえ歩行器を選定し，通所介護利用時に歩行評価を実施した．評価内容を PT，CM に報告し，介入方針や歩行器の使用範囲を検討した．適宜，経過を報告し合い，X+1 年 3 月に歩行器歩行は安定し，自宅内移動が自立につながった．

【まとめ】同一法人の施設による連携のため，定期的に他職種と協議しながら介入することができた．情報の共有，連携は職種間の考え方の相違もあり，実際の現場において容易なことではない．しかし，ADL や QOL 向上のためには，他職種による連携・協働してくことが重要であると考えます．

(598/600 字)